



安富筆記

四

四

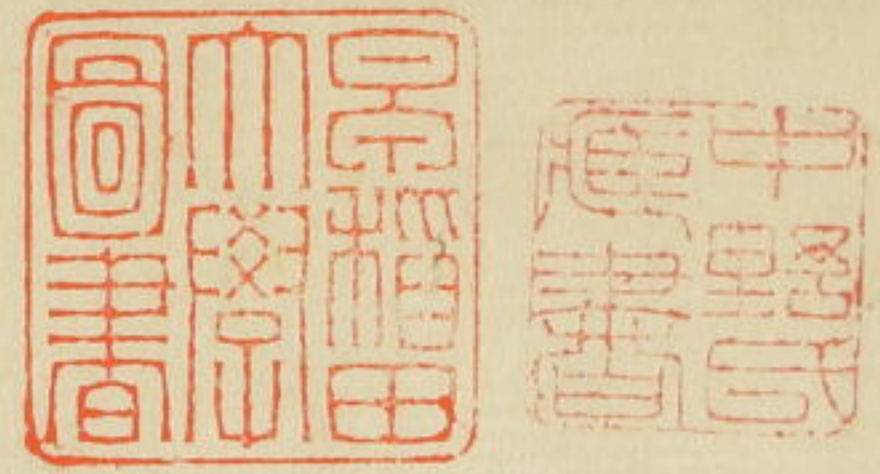
僧
494
4



河原 三



漫録



一軍陣ノ獨身ノカセキハ鎗ト合スルヲ第一トス物初ニハ鎗強疑

キヲ譽テ鎗ト呼事ハ古ヨリ鎗程強キカセキ園無書記

末代ノ謗ニテ鎗ト云ニ其品八条アリ所謂

一番鎗 二番鎗 小返鎗 大返鎗 付入鎗 城攻ノ鎗

籠城ノ鎗 詰トメノ鎗

是ニ指續タル働 四条アリ

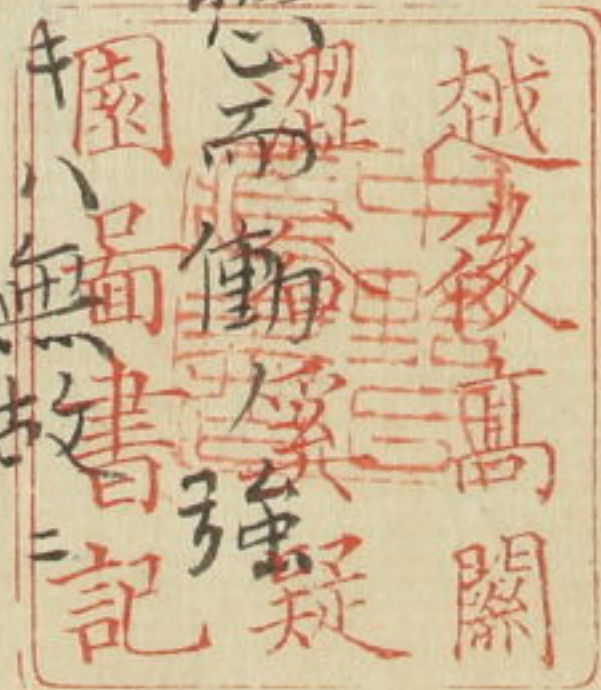
一番乘 乘込 鎗服太刀 鎗服弓

此外 高岩 七条アリ

鎗下高岩 鎗場高岩 退口高岩

堀高岩 場中高岩

掘討高岩 崩



凡鑊ニ似テ鑊ニテナキ品十五ヶ条アリ但ハメヤリト云

一 禪家僧司

修造部 作事奉行

淨頭 東部奉行

首座 一番座頭

藏主 藏奉行

浴主 風呂奉行

且過僧 江湖ノ僧共一宿ニ所サレハアシタニ區ルト書

行者 禪家ノ間者ニ只ノ時ノ僧ノ如ク衣ヲ著テ廻ル

副參頭 張リ物洗濯ノ奉行ナリ

庫主 庫裏坊主

堂司 掃除奉行又諸堂ヲ廻リ花香油ノ退漕ヲ告ル人トアリ

頭首方 學問ノ宗ヲ知ル

書記 物書

知客 客人時長老(養者名僧)

塔頭坊主 其時ノ住持隱居ノ房

山主 庵主ナリ

參頭 行者ノ頭

供頭 調菜頭

炭頭 シヨシ炭奉行

出納 米錢ヲ納ル人

木守 寮僧塔頭(所版ヲ印テ時ヲ造ル)

火鈴振 座禪ノ時ノ僧

外僧堂 一切寺ノ賄ヲ在ル

知事 所領ノ賦ヲ在ル

副寺 米奉行

直歲 味噌塩米酒擬ノ人

典座 僧ノ名字ヲ付時悉ク皆斗フ人

都官都聞 衆僧ノ頭

方丈 衆僧ノ頭

高祖大師 宗ニ最初弟ノ禪師

山守 薪奉行

門守 飯米ヲ副ル僧

陪堂 板フク者

從僧 所領ヲ知テ裁ク人

都寺監寺 仙事ノ勤声名ヲ始ル人

維那 鐘突キヨニスル者

寺住兼住 定使

駟使 力者

同明 他寺ノ僧學問ノ為

掛塔僧 未レト一會有ラズ

一 禪僧位序 三礼口決

大徳寺妙心寺派僧位序

單寮<sup>四</sup>—<sup>三</sup>首座—<sup>二</sup>藏主—<sup>一</sup>書記

是ヲ長老ト云

五山之僧位序

東堂<sup>六</sup>—<sup>五</sup>西堂—<sup>四</sup>單寮—<sup>三</sup>首座—<sup>二</sup>藏主—<sup>一</sup>書記

和許長老ト云 長老ト云

一 くらむらむらむの秋

諸法実相と云々時々の有る法の妙法一如と云  
いれども向の蟻も仏也仏に世にまじりてかざる  
くらむらむの秋といふはくらむらむの秋といふは

くらむらむからむらむとてや凡夫のよるをいふ  
くらむらむの秋といふはくらむらむの秋といふは  
くらむらむの秋といふはくらむらむの秋といふは  
くらむらむの秋といふはくらむらむの秋といふは  
くらむらむの秋といふはくらむらむの秋といふは  
くらむらむの秋といふはくらむらむの秋といふは  
くらむらむの秋といふはくらむらむの秋といふは  
くらむらむの秋といふはくらむらむの秋といふは  
くらむらむの秋といふはくらむらむの秋といふは  
くらむらむの秋といふはくらむらむの秋といふは

世上人の作法

真南禪寺普明国師所作

一 馬毛 法少卿と云々





一伊弉神道十二部ノ書偽書也

御鎮座本記 御鎮座傳記 心御柱記 倭姫命世記

御鎮座本縁 神名甄録 飛鳥本記 宝基本記

古老口実傳 伊弉所土記 御鎮座本記 杵姫傳記

右ノ内五部ノ書ト云ハ傳記。世記。宝基。漢記。杵姫ヨリ

一武甕四郡名江戸之方

御城ハ豊鴻郡之中心也

三田白金目黒ノ辺洗谷ヨリ西南ハ荏原郡也

中野ヨリ西ハ多摩郡也

川口千樹川ヨリ限リ北ハ足立郡也

浅草川ヲ限リ本所深川ハ昔飾郡也

古ハ川ヲ限リテ下総国ナル故西国橋ト名アリ今世改テ武

総西国ノ界ハ利根川ノ流ニ定ル下総国本座ヲ新武藏ト号ス

一人たけのこ物たけのこ名たけのこ後たけのこ乗たけのこ也たけのこ河海ニ云人たけのこ給たけのこ破たけのこ國たけのこ郷たけのこ記たけのこ

注云副車ソノクルマニ後乘也河海ニ云人ヒトトシテ給ヒトトシテ破ヒトトシテ國ヒトトシテ郷ヒトトシテ記ヒトトシテ

名出車ト云花鳥ニ云出車ハ公方より点々して其人よりあり

人ヒトトシテ給ヒトトシテト名ヒトトシテ行ヒトトシテ也ヒトトシテ

一猿治馬病ノ稗海ニ晋趙固之馬病郭璞見之曰使獺猴

相馴之病可俞云於是随璞之言果馬病愈矣或曰此説妄

一土蜘蛛ト云フハ土穴ニ住ル盗人名也日本書紀ノ神武天皇ノ

紀景行天皇ノ紀等ニ蜘蛛ヲ征伐シタマヒシ神ノ皇后記ニ蜘蛛事  
見タリ源賴光ノ蜘蛛ヲ征伐セウレシト云モ蜘蛛ノ沃タルハ非ズシテ  
盜賊ナルベシ田津媛ヲ誅ス

一 神前狛犬ノ事神明憑多田進藏源義俊別云大和郡山根松宗與親著獅子狛コノ夏火

醋芥余ノ故事ニハアラズソレハ隼人ノ一ニテ犬声ヲ羨シ来ルニテ也

南殿ニカゲノ狛コトテ繪ニカレシハ史記卷ノ五ハ秦ノ本紀ニ見ヘ

タリハルケニス狛ノ例ニテ卯氣ヲ避ルノシルシナリ口唐礼集義ニ

曰畫雙狗於宮内取事於秦故云又社前ニ置ハ後ナリ

獅ノ類ニシテ獅ヨリ猛シ唐則天皇后女主ナル故造之玉座

ニ置萬物ノ鎮子ニナサレシヨリ日本ニモ唐家ノ風ヲ用ル

多キ故天子ノ裾ノ鎮子ニ之ヲ用ヒ玉フ山槐記中山内府志親公記見

夕リ社戸ノ開ザル鎮子ニモ之ヲ置ル中ニテハ上代ノ風石見

風土記曰長江社實ハ鎮子社也祭大邑貴神於西國始用鎮

子宮也其鎮狗自首濟國所貢也貞云狛犬ト云ハ高麗犬

ナルヘ百濟ヨリ所貢ト云高麗百濟新羅元一國也朝鮮ト云

後三分ル後又一國ナル

一 三代實錄貞觀十三年十月記曰本朝制度擬唐礼

一 シロモジノ木皮ヲサリ木ヲ刻ミ煎服スレバ積痞ヲ治ス又小兒

ノ疝疾婦人頭痛ヲ治スト云妙也ト云用テ驗ヲ試ムベシ

一 文武天皇紀大業元年正月朔文曰天皇御大極殿受朝其儀

於正門樹鳥形幢左日像青龍朱雀幡右日像玄武白虎

幡蕃夷使者陣列左右文物儀於是備矣





白粉とろろ香粉  
やうこここ ときき 掃く

一眉作箱こ入

大女命十十 小女命十十 紅くま八八

かひひ名な二二 二二とと二二 白粉しろ下した二二 大おびび

小こびびり 移うつすすをを袋ふくろ

一鏡かがみ臺たい 但たゞふふれれととここにに世よにに入いるる

くくここ 九こかかここ わわかか梅うめ 水みづ入い

三さん柄へ二に具ぐ 白粉しろととろろ 女めここ時とき かかここををて

ももここ 毛けぬぬららいい ぐぐららいい

一いみみくくくくいいののこころろににわわががののこころろににいいれれるるののこころろににいいれれるるののこころろににいいれれるる

一兵へい糧りやう丸まる 義經軍術武鑑 以下諸家評定見 小笠原昨雲所著

黒藤皮 三百目シシヲヲ捨す皮くわヲヲ用もちルル是こ唐たうノノ紫むらノノ花はなササリリ藤ふじナナリリ

人參 百目頭ひゃくもくかぶヲヲ切き捨すキキカカニニ黄わう色しきニニ炒ちやう

羊膽 四百目黒こく燒やうニニスス羊やうノノキキモモ也也

虎肉 三百目曼まんモモ黒こく燒やうニニスス虎こノノ肉にく也也

葛花 一貫目陰干いんかん是こららのの花はなナナリリ

白朮 八百目皮くわヲヲ去す刻きニニ黄わう色しきニニ炒ちやう也也

肉豆寇 二百目酸さんニニテテニニルル也也

黑豆 一斗五升

小豆 一斗五升

糯米 一斗五升

右何れも細抹ノ蜜ニテ子リ用多サテノ人ノ働ニヨル用  
之テ飢ル事ナシカリクノ事ニ働ラズニク又ハ服用ナク  
多クハ時ハ換ル大便秘ナリ

一舟ニヨフス茶方

武島 十々分ヤキ  
ソシテノホ子

木香 十分皮ヲ削リモリ

青皮 五分内ノ白ニヨル

枳殼 白ニヨル削去  
五分

丁子 五分皮ヲ削去

美草 五分皮ヲ削去  
カニザウノ

右細末ノ蜜ニテ煉ル生薑ヲ蜜ニセシテ生薑去其汁ニテ  
煉ル

一金瘡茶方 金瘡名人近江国大膳亮家傳

人參 二分カシラヲ去

川骨 五分皮ヲ削去  
酒ニツケキサム

熟地黄

二分

川芎

二分

白芍薬

二分酒ニツケ黒皮牡丹皮 二分外皮ヲ削去

肉桂

三分酒ニツケ頭ノ  
黒キ所ヲ切去

甘草

五分上皮ヲ削去

右割ニ合香色ニ炒リ一包ニ七分宛如常煎ニ手局ニ用ノニモ  
シ直シリケ不來

一血トメ茶方

室賀入道傳

騏驎竭

三分其倍

紫檀

同煎

熟地黄

二分

川骨

七分酒ニツケ  
酒ニ漫シキガミ

楊梅皮

五分其倍

紫河車

六分其倍ヤキ人ノエナシ  
酒ニ漫シキガミ

辰砂

八分ヨリスリ水ニ  
ツケホケシ去

象牙

八分其倍ヤスリニテ  
スリテコニスル

當歸

三分其倍  
キサニ炒ル

右十味刻ミ合一色ニ十二分ツ酒ニテ煎シ疵ノ口ヲ洗フイカ程  
深キ疵モクナルヲナシ痛ム事ナシ血光ナク妙シ

一 氣辨ツヨクスル茶方

キリン血 五分 搗碎同前

薄荷 六分

人參 一分 搗碎同前 沉香 一分 其低

辰砂 二分 搗碎同前

右粉茶ニシ白湯又水ニテ用多少ハ人ノ氣色ニヨルベシ但毎  
病ノ人余リ不可過此茶手負ニ限ラズ常ノ人ニモ可用又  
伏兵ノ氏是ヲ用レハ氣勢ツヨクナリテ退屈ナシ

一 寒シテ汚ク茶 服部治部右衛門傳

雞卵 十枚 是ヲ酒ニテ 干姜 十枚 砂

肉桂 五分 其低 丁子 八分 其低

防風 三分 二枚 二枚 羌活 五分 搗碎同上

独活 三分 同前 桔梗 二分 ナシラカダラカ砂ル

桂心 五分 其低

右九味細末ノ蜜ニ煉リ多少寒ニ氣ニヨル野伏ノ時用衣  
薄シトイハレ不寒ニ濕氣ヲ不結又云 玉子、干姜粉 等方酒  
ニテ煉リ持モヨシ

一 暑ニシテ用茶 腹痛ハ何ニテモ草ノ葉七色ヲ丸ノ可

舌度ニ試ルニ妙シ

一手負人血暈ハ落タル也ノ茶方  
手負外ハ血不流腹中ニ流レ入腹張りナリけりト馬糞

シ小便ニテ煎シ用ユヘニ大便ニ血下リ快クナリ

一 疫病ヲ除ク茶 雄黄 胡麻ノ油ニテトキ鼻ノ穴ニス

ル乳香ヲ焼キ鑿ニ薰ズレバ此病シウケズ

一 息金丹方 宋嶋雲奇秘書 以下同

黒地 二十枚 黒ヤキ カラズ(ヒナリ) カラズ頭 黒ヤキ但昔ノ先ヲ去 人参 三五枚 煎同

龍腦 一匁 其傳 麝香 五分 其傳 鹿角ノサキ十五

梅干ノ肉 十枚 黒ヤキ 右細末ノ蜜ニテ子リ馬ノイキアヒ

又人ニ用テヨシノドノカワキラ止ル人ノイキアヒニモヨシ

一 子フリ茶 竹ケシ茶 義経書拾物詔ニアリ

天嵐 五枚 黒ヤキ 梧桐葉 八枚 百足 陰干 其傳

白檀 五匁 其傳 木綿核 五枚 其傳 丁香 五匁 其傳

沉香 一匁 其傳 黄牛糞 十五枚 結干 水銀印 三匁

右細末ノ竈竊盜ニ行タル時番所ノアツリニ

テ焚クベシ此香ヲカリ人ハ心カチノ武士モ眠リテ前後ヲ

知ラズ 右ノ茶ヲ焚ク由自身ノ目鼻ニスル茶如左

硫黄 五匁 其傳 龍腦 其傳 夜明砂 二匁 其傳 人参 三匁 其傳

丁香 二匁 薰陸香 三匁 其傳 安息香 五匁 酒浸シセシトキテ又

右細末胡麻ノ油ニテトキ目鼻ノ廻リニスル子フリ茶ノ香ヲ

カギテモ子フリケ不來口傳

一 火ト止茶 艾葉 十匁 イワウ 八匁 塩硝 五匁

ナベス 五匁 シヤウナウ 八匁 牛ノカウ 七匁 実石 十匁

右艾葉能ト和ゲ綿ノ如クス残リノ茶ヲ粉ニシテ能ク定セ

自云子フリ茶ノ香敵ノ鼻ニ入ラハ敵不審ニテ搜スヘシ如何

晴天ニ向日と付ケトルスレバ但水晶ノ玉ノイカニモ疵ナキヲ持

テ目ニサシムケテ玉ノコナクニ有テ葉ヲアテ居レバ火ウツ

リ采ルル恐ビノ火ヲ不持時用之ホクニモヨシクニ火ノシ

ニモスル也

一袖ノイ松ノ事 夜ウキ忍ビ共ニ イハウハタ シヤウナウ

ツシハン ニハ 実石 ハタ クウノ 土 ニハ 唐ノ 共自キ志

右ゴニノ油ニテ木綿ツギギノイカニモ古キニヌリ櫻ノ木コニカニリ

テ是ニ卷付ケ長サ四五寸ノ松明ニテ袖ニ入テ持シ取用ル時

火ノ付事ハヤリシテシカモ一寸一里リアカス

一筒ノ火ノ事 シシビノ傳 ツシニカニ 嵐フニ ニハ

唐ノ土 ニハ 杉原紙黒燒 ニハ 実石 ハタ 大ニテ黒燒 根葉 共ニカ

右ふのりら 煉ラるラ火ヲ付ケ銅ノ筒ニ入持口傳是と懐中

ノ火トモ云 以上諸家評定ニ見

一浮沓ノ事 水ヲカ入ル時用ル也

浮沓ノ秘傳カに秘ありといふト秘カもカあり

造作ともしてカいカもカ家カのカろカろカらカ始カル ハナ カ カ カ

しカそのカのカれカるカ儀カもカのカろカろカらカ始カル

昔カ傳カのカろカろカ入カとしてカるカをカいカくカ時カ胸カのカろカろカわカてカ出カのカ

へカるカかカもカいカへカるカのカきカめカいカはカらカがカりカ

一駒カとカるカりカらカるカりカ 牧カらカしカ素カらカあカるカ駒カをカわカらカるカ

いカるカ駒カしカもカとカるカりカらカるカりカとカいカらカるカ駒カのカ

垣カとカらカらカるカるカるカるカのカ儀カもカいカらカるカとカらカるカるカらカ

とうくんまんとくしん牛少し牛ふははと好む  
 こそ大ぬ借り人ふとてぬぬまを人してはむあ  
 こそぬしひしひるる人天下か秘とくぬとらひく  
 ら糸りしとて巾帯と結くるのまへくんと帯をさ  
 下まひりしとて人のひらりぬぬまをらりて其  
 にかまそく人ふまうつくぬまをいひこ  
 と用ひてはぬまを結して人ふとて糸帯を糸る  
 らしとていと人ふひらりぬぬまをらりて其の  
 糸帯をいひとて人ふひらりぬぬまをらりて其  
 是なり  
 古馬藏助談

出授流ニ駒ヲツクル秘  
 傳ノ術帯ヲ用ヒ事

一 多賀豊後守高忠

〇雍州府志卷四 宗仙寺寺院川上 受宥郡在高  
 倉通五條橋南曾因道元和尚之遺誠而曹洞宗寺  
 院所在京師之者少所謂慈眼寺天寧寺此宗仙寺  
 三箇寺之外未聞有曹洞宗之寺斯寺斯寺寛正年  
 中京師所司代多賀豊後守高忠為大檀越而歸宗  
 仙寺喜山洞院則置肖像

〇同卷十多賀高忠塔陵陸基門受宥郡 在五條橋通  
 南宗仙寺是多賀豊後守高忠也應仁文明之際京  
 極持清神京師之所司干時高忠為所司代掌雜務  
 聞新訴時人服善政称德化歸依曹洞宗而建此寺

曹永平寺道元之遺誠而曹洞宗寺院所在京師者  
少矣宗仙寺慈眼寺天寧寺等也

○同卷 多賀高忠塔 陵墓門 在惠日山東福寺

即宗院是多賀豐後守高忠而跡大源本公

常政云多賀高忠當家中與祖ニテ尤尊崇不少所也

當家於江戸嫡流タル多賀高當カ家ヨリ宗仙寺ハ常ニ

通達アリテ當家ノ開基寺ト稱セリ然レモ寺起立ノ

赴キ爰ニ出ル所ト違アルアリ其委ハ短文ニ難記故コ

コニ略之仍テ按ルニ此書面ノ取違カ高當家傳傳ノ取違

カ於今不分明也重而可変ナリ第一宗仙寺ニ高忠ノ肖像

アルト不曽知シ即宗院ニハ高忠肖像ノ画アリ依之常房

高當ガ祖父ニ是ヲ拜シテ家ニ傳ヘラレタリ予モ亦高當ニ是ヲ拜  
寫セルモノ

一貝おわいのり 神代ノ昔事八十神ノ事ノ

大己貴命イカヒヒノミと云々して鏡人と云々此ノ時神皇產灵言

賀貝姫イカヒヒノミ蛤貝姫カキノミと云々此ノ時神皇產灵言

姫イカヒヒノミ岐作カキノミと云々此ノ時神皇產灵言

わりのりイカヒヒノミと云々此ノ時神皇產灵言

の神作イカヒヒノミと云々此ノ時神皇產灵言

命イカヒヒノミの神イカヒヒノミと云々此ノ時神皇產灵言

より賀貝姫蛤貝姫イカヒヒノミの名イカヒヒノミと云々此ノ時神皇產灵言



とすれの記し人の世と有りて、景行天皇五十三年正月  
に東國へ行幸ありてと伝ふが次第に、小麻行の海に  
時大定く、<sup>ミサガ</sup>覚かた鳥のなるさるるをよびのい其鳥の  
形とらんとして海中へ出押るるを侍と<sup>ウメキ</sup>白蛤と傳  
ふ小磐<sup>イハ</sup>麻<sup>カ</sup>六<sup>ツ</sup>麻<sup>カ</sup>その浦の浦をとりしむいて<sup>ツキ</sup>襪<sup>キ</sup>を  
りし白蛤と勝として天皇に御答と<sup>アハ</sup>なぐりつとこと  
う小伝く麻行の浦の蛤貝とい伝いて貝おわいと  
するも傳くことと<sup>アハ</sup>披<sup>キ</sup>御甚<sup>キ</sup>案<sup>キ</sup>各所<sup>キ</sup>分<sup>キ</sup>の<sup>キ</sup>記<sup>キ</sup>は  
しして用れしとありす

一 陣と云い建春門と云い大出の陣と云い宜秋門  
かり

一 京都住五鍛冶 丹波守吉道 近江守久通  
大和守吉道 和泉守来金道 伊賀守金道  
右禁裏御用五鍛冶也古代ヨリ定メ置ケル由昔ヨ  
リ今ニ至テ毎年正月天盃頂載仕<sup>レ</sup>由此時小刀五本宛  
進獻仕<sup>レ</sup>由

一 點心 佛寺法會ノ時終日ノ勤行ニ氣ヲ屈スルユヘシ慰  
メシ為ニ種々ノ食物ヲ拵ヘ備ルヲ點心ト云菓子類類  
類等也

一 鞠場四本懸り乃歌  
わいさやしのねい成まればわすれを楓のちをいつしとあり  
まを柳を底色の角まきりれを楸のれいも宮さり

山城名勝志第三之三 諸神記云 中御門西洞院東願法  
即井小社三座是鞠ノ神也此城成通卿舊跡一計案  
林 二春楊花 三樹尊 形猿額金色ノ文字貞ノ  
上ニ神名ヲ顯ス申ノ日以紀氏祭之故年始鞠用件日兼  
邦百首歌抄猿田彦まりのの坪おあめくまりのの坪  
ともあつて○古今若くは侍従大納言成通の時に此  
神顯るに心感うら見ゆりとの形も是舊也文略  
何よのこゝろあつてくは成通の性こゝろも若くは  
知りてくはくはと心感せしとそ眉にをりくは成通と  
あけられ一人の額よ春楊花一人の額よ夏竹林一人  
まの秋園と云文字金と云らぬり○鞠の記ありやが

のこゝろこれ神を也云く○や井の春を後に成通世く  
始れりて成通をまじくくはこれ元二年四  
月の上皇と長とともをくくは成通大納言の子  
恭通とくも一人宗長雅経とて連署の表表と云  
りてくはくはあつて何のゆりやまりのの形と云  
やと云くはくは成通の景と云くはの形と云くは  
とくはくはの形と云くはくはの形と云くは  
一 永樂錢の事 秘本武家盛衰記卷二十三云 亦  
樂錢の事(海)と云くは永十年八月二十日大凡と云  
ノ申ノ下別名和之禮れ名之流浦(海)と云くは  
時鎌倉足利と云くは海満無下知くは名は傳りて  
十七

言なりと金貨を和中の言換るる明朝の承業  
後教百方費アリといふ將軍は備新將軍は持の  
あり方とづのいふその和中の後承業は利満るに  
下の人々歸玉せしむるは凡そ放多れりなり  
そ和の位階は新多程とつとせよされぬより国東  
よの後と用らる天文十九年ノ比ヨリ国東をハ記氏  
の和承ニ銀と云西後と云集めし同一を成り用元  
丸市町ノそのカノ悪後と撰と編と開神ヲ引出シテ  
互ニお人々を備ヤ、アリと云又之に初承業は承業氏  
原国ハ別ヲ打從（臣山南信流）定位ハ承業細分ち  
原物も承業の呼集め承業ハ銀錢ニハリタレバ

他後ハ必不可用承業計ヲ用ベシト云理ヲツケ事ナリ過ニ  
之承業ヲ用しノ不止銀ハ正方（堂）ノ国東ニハ承業計ニ正  
十八年七月北条滅亡ノ後ツイニ家康云ノ由ハ入幕也九年  
二月ヨリ天下平ク承業ヲ用ニ銀ヲモ不捨承業ヲ用テ一錢ノ  
代リニ總四五ツツカヒケリと云其後ノ承業ヲ撰ハ備と書  
買ノ暇輒カラザリシカハ高夫モナイワリノ事多シ依シ家康  
抑下知シ大久保承業も忠謀也多承業も正信ニ余シテ承  
業トシテ十二月ハ承業後ヲ撰制スル、昔武別日本橋ニ  
高札ヲ立テラレ天文十九年ヨリ承業ハ總ニ承テ五十七年ノ  
曆教ヲハハハスル  
右俗説承業ニ承業  
後ノア又下ニ記ス  
一五木 桑 槐 桃 楮 柳 續和漢名教  
十八

一 八草 菖蒲 艾葉 コホコ 苜蓿 荷葉 蒼耳 忍冬 馬鞭草  
藥草目書

一 馬街直鞞流神當流之傳系 直鞞流

神尾織部言久 直流神當 二流始祖

直鞞流受傳 小野常官政直 | 村松四兵衛歳久

神當流受傳 渡邊勝兵衛尉良 | 松田傳兵衛政右

村松四兵衛歳堅 | 村松太郎兵衛歳直

村松四兵衛歳廣

安藤久太郎

多賀外記常昭

一 近授流 有馬一守 後備後守 傳之 術ノ流アリ 木馬ニテハ氣ヲ教ユ 生馬

ニテ 兼方ヲ 教ユ

一 八丈嶋ノ事 北條五代記ニ伊豆下田ヨリ 南ニ八丈島アリ

此島女甚美 容貌アリ 昔ハ女ノミアリ シニソノカミ下河辺六郎  
行秀入道 智定房 此嶋ニ渡リ 余女子ヲ生ム 田カモ 余多ニ  
ナリ ストカヤ 延徳年中 北条早雲ノ家人 朝比奈氏 初テ  
此嶋ニ行伊豆ノ内ヘキハノ北条ハ 毎年 年貢ヲ出ス 延

德三年閏四月五日伊豆國下田ヲ出船七日ハ丈ツク〇貝  
 原氏云ハ丈島ハ世ニ云女護ノ嶋ナルベシト〇奇部考ニ云ハ  
 丈ハ伊豆ヨリ百里程未申ノ方シテシクハ草日本ノ蒸大根  
 ノ根ニツクリ常ニ食フ食フ者疱瘡シノガル香ヒ芥ノ如ク  
 一紙ノ事 日本紀敏達紀元年高麗上表疏書干鳥羽  
 字随羽黑既無識者辰雨乃蒸羽於飯氣以帛印羽悉  
 寫其字〇王辰雨ト云ナリ是此時ニテ紙ナカリシ故帛ヲ以テ字ヲ寫ス  
 ルナルベシ羽ヲ蒸テ字ヲ印寫スハ紙ニハ猶能ク移ルベシ共  
 紙ナキユハ帛ヲ以テ寫シタルナリ〇同推古紀十八年春三月  
 高麗王貢上僧曇徴法定曇徴知五經且能作彩色及  
 紙墨并碾磑ト見タリ此時ヨリ日本ニテ紙ヲ造リ始メシク

一僧正僧都法頭ノ始日本紀推古ニ見タリ推古三十三年ニ見タリ  
 一ウブスナ 日本紀推古紀冬十月癸卯朔大臣遣阿曇連阿曇  
 阿倍臣摩侶二臣令奏于天皇曰甘昌城縣元臣之本居也故  
 因其縣為姓名是ヲ以冀之常得テ其縣以欲為臣之封縣云云  
 〇大臣ハ菟我大臣ナリ 本居ノ訓ウブスナトアリ本居生レ處ヲ云也今神ノ夏  
 ラウブスナト云ハ本居ノ神ト云也神ノ字ヲ付テ云ベシ  
 一強盜竊盜ノ字 日本紀推古紀三十四年ノ紀ニ見  
 一天狗日本紀 舒明紀九年ニ見タリ  
 一健児コシライ 相摸回紀元年六月ニ見又天智紀二年夏六月ニ同  
 余チカラヒトニ所ニアリ  
 一努力チカラ努力チカラ 記右同 慥矣チカラ 慥矣チカラ 日本紀皇極紀ニ見タリ  
 四年四月禁誡ノ詞ナリ 〇妖術同上 記ニ

見タリ高麗ヨリ傳來

○不意ナリモナキニ右同紀源氏物語ゆくらみ

一 賀正礼 日本紀孝德二年春正月甲子朔賀正礼畢朝拜下

一 大郡中郡小郡○里數○田數段步○稅稻束又見白雉三年常政云又孝德三年无孝德三十九年地數○絹布

數○馬數○兵器定○仕丁數○采女定孝德紀○懸鐘鼓

匱見同紀○葬礼同上

一 蚶殼ヤカガヒ 蚶異名ヲ瓦屋子上云其カラ瓦屋ニ似タリ魁蛤也

云蚶殼ノ久シキヲ炭火ニサス酸ニツケ三度ヤリ酸ニテ丸シ

吞ビ此薬ハ血塊痰積一切ノ氣血冷氣癥癖婦人ノ治ス

積聚ノ業ナリ

一 易繫辭曰精氣為物遊魂陰陽ノ精氣結テ生育ス遊魂ハ陽魂散陰魂止陰魂ハ魄為變

一 及第 綱鑑唐代宗廣德元年注曰進士謂所試一

大経併爾雅帖皆通而後試文試賦各一篇文賦通

而後試策凡五條三試皆通者为第書元故事八甲

科新文云射策者乃難問疑義書之於策量其大小

署为甲乙之科列而署之不使彰顯有射者隨其所

取得而釋之以知優劣射之为言投也

一 校也シテハノキニシルヤ不審 二條四節長能法村の功者といふものと

四ノ九ノ十ノの事いふこととて射の事いふことと

射の事いふこととて射の事いふことと

九ノの板と射してその一分とて射の事いふことと

ト板の事いふこととて射の事いふことと

儀の事いふこととて射の事いふことと

果合文はナシニ誤リモ

アリ足方  
て可用

一馬のけの夜

ツチ  
は夜まに全支ヲ字ス  
忘し旋毛を衣る喪門七走ヤ陸乃らまじのたとひ

一的繪

三重の墨  
輪ナリ

續日本紀一文武帝大室三年正月

定大射祿法親王二品諸王臣二位一箭中外院布

二十端中院二十五端内院三十端三品已下有差

○所謂院者射棚以及造之其的為三重圈子因謂

之院說文有周垣之義蓋取此也名物  
六帖

一永樂錢ノ事上三モアリ 貞觀會津年譜云第百七代正親所

院永祿元年午戊同十年卯丁自此年用永樂錢按用永

和錢可天文未未審○同十五年庚戌九月十日捨永

和通寶錢用京錢京錢者歷代之雜錢也傳云駿府

大相国公一夕夢換城醒告忌於本多佐渡守佐渡

守敬曰是公不知所患志路可相換太易也以京

錢換永樂公尤容其言終如此云其事傳俗謂錢

曰代物代訓志路也故取焉然也

一金一分判同書云第百八代後陽成院文祿四年己亥

此年金一分判始焉

大云其若烟草也元其  
若不相草也我國俗誤用  
苳若始用焉

一采價 同書曰 百六代後奈良院亨祿三年庚世

上豐年會津采價一升十五六錢

一野心 日本紀成務紀一見左傳狼子野心

一鎧直垂 毛利記云先ハ少輔次郎右馬頭陸奥守

從四位上行元執三品後奈良院即位之料依調進之功

賜錦直垂至光源院殿御時任大膳大夫

一 鉄沓 軍中ノ馬ニ用ユセシク鐵沓イワシノワタ右等合合

セ其内ハ少ノリヲ入テ能スリ合合入遠火ニカケヲキニ時モ

置テ扱馬ノ尻ノ内ヲ能アラヒ有子リ物ヲクルミガタハルギリニ

入レ上ヲヘラニテ能ナデ又其上ヲ鉄鉄火ニカシアブリ其燒ガ子

ニテ上ヲワニクナデルハ少カハキヲバ其終常ノ沓ヲ折折サテ

馬屋ニ入明日乘乗此鉄沓ヲ用レバウラ痛ム事ナシ右ノ子

リ物ヲ取テ捨タキハ上ニ油ヲスリ置バ置ラノヅカラ上ル物ナリ但

此沓ヲタノミ石上ナドヲ乗バ随分右ノ子リ物ヲカバ板

二ニハシ皇天云本海也後世モニニハ其海物ノ文ハ似セタシト云

一 額 日本紀天智託六年潤十一月丁亥朔丁酉以錦

十四疋緞十九疋緋緋廿四疋紺布二十四疋桃染布  
五十八端芥二十六鈿六十四刀子六十一枚賜椽

磨名等

一 篋輿 和名抄云漢書注云篋輿 上音鞭和名 編竹木為

輿也刑罰ノ具ニ見クト見タリ今世ノ乘物ニアシト云ハアミイタノ畧語也

一 日本紀天武十年定律令格式又令記定帝紀及上

古諸事見タリ

一 漆紗冠 天武十一年六月丁卯男女始結髮仍着

漆紗冠

一 礼容 推古朝推古朝跪礼朝匍匍礼ヲ定天武朝止之復

難波德朝之立礼



一銀始貢 天武三年三月同十二年四月詔用銅錢  
莫用銀錢

持統五年伊豫国司田中朝臣法麻呂献宇和郡御  
馬山白銀三斤八兩アサカ子一籠

一衣服有襪每襪オビ冠カサ指緒サシ禪ゼン長紐ナガヅナ天武紀十三年  
此外冠服制アサカ子

一深蒲菑淺蒲菑 服色同前記見於殿前以令博戲  
同上

一霞錦カサミ男女カサミ 婦女垂髮于背右同紀カサミ見朱鳥元年

一精進 弘決天台書曰每雜故天台精每間故進天台

一詩賦興自大津皇子始事見于日本紀持統紀懷武深天

一華ケシ纓 日本紀持統紀云元年三月甲申以華纓進  
于殯宮此曰御蔭カサミ 又見二年三月己未朔己卯以


華纓進于殯宮大嘗ニキスキ

一鞍具一具具 持統紀三年正月ノ紀文ニ見タリ具具

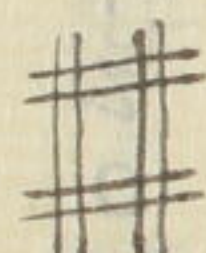
鞞鞞鞞鞞等追具具シタルヲ云々 鞍橋ニ具具也今世鞍

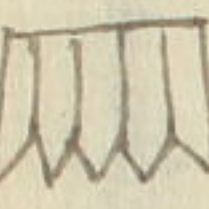
皆具ト云ニ同シ

一令一部二十二卷持統紀ニ見 考仕令同紀ニ見

一鏡ノ小手鎖ノ中ニ  如此ノ板金ヲ額ノ板ト云々細細鎖

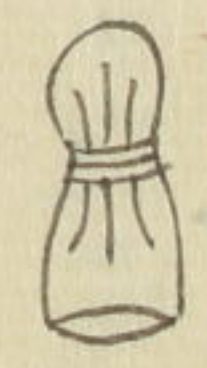
ノ上ニ紋鎖ヲ入ルヲラシメテ鎖ト云々八重鎖也○鎖ノ中ニ所

如此ノ金物ヲハカ拵金ト云々  如此如此ヲ格格子鎖ト云々

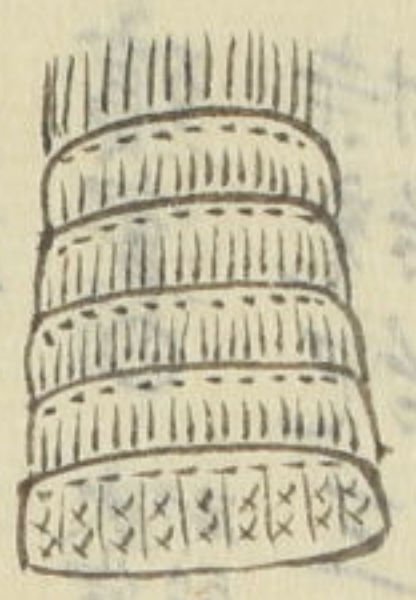
手クビニ  緋ニテ如此如此ヒヒ細細物ヲケシト云々○手首ノ小

甚

七ナリウナニテ緒ヲ付タルヲ巻苗ノ紐ト云○コテノ上ノ方ニ小キ  
 袖ヲ作付タルヲ毘沙門ノ小キト云○一ノ腕ニ腕ニ條金物  
 付タルヲバシノコテト云○手先ノ方ノ腕ニバカリ條金物付  
 タルヲ手先條ト云○小田コテト云ハ袖ヲモト付ズ鎖ノ  
 中ニ上下鑄ニテモカク金ニテモ散シ付タルヲ小田小キト云  
 樽金ヲモ付ルヒチカ子丸ニ上下ノフクベ  
 ○指ノ形ナク大ユビモ丸キヲ鯨形ト云



フリベカ子  
シハフリト云



如此ナルヲツボケサント云


一 草スリ  
 一 猿頬目鼻 近年越中ト是ヲ云  
 一目ノ下頬當半頬 近世隆武烈勢ノニツアリ隆武常ノ如烈

一 勢ト云ハ鼻ノ上ニシコアリ口横ニ廣ク齒出テ怒リハ舐也  
 一 伊豫ハイタテハ板金ヲメントリ羽ニカサ子トツルヲ云  
 一 板ハイタテハガルタノ如ク切テ重子ズシテ並ベテトツル也  
 一 踏込ハイタテハ鎖ニ飛ガ樽ヲ入タル也踏込ニ仕付ル也  
 一 或書云名馬 甲録 保元平治ヨリ元亨建武ノ頃マテ皆諸士モ鎧ヲ  
 著云云建武ヨリ百歳ノ後正長ノ嘉吉ノ間ニ赤松ノ族士等  
 胴丸ヲ本トシテ諸ノ別具ヲ相備テ利用ヲ取テ威タル物  
 今ノ具足也ト云云今ノ具足ハ元是カケナル 胴丸ヨリ出タリ  
 一同書云大荒目ノ胴丸ト云ハ縫延ニシテ毛ノ荒キヲ云ナリ今具  
 足ノ大石目ノ敵塗ヲ大荒目ト云ハ非ナリ大石目ノタメキヌリアラフト云海草ニ  
似タルユハ近世アヤニ唱ヘタリ  
 一 ハイタテノ尾札ト云ハ板目草ヲ瓦ノ如ク打テ昔瓦ノ如ク重子也

一 鎧ノ草摺ハ四回也前後左右ハ下ニ是ヲ執紫形ト云

一 篠立膝當ノ篠ヲ俗ニ馬ノ柄ト云

一 鎧ノ相引ノ小セヲ内ヨリ緒ヲ通スヲ作威ト云常ハ外ヨリ通ス

一 花粧ノ板等ノ金物  如此ナルハ相金物ト云ハノ字ノ

形也

一 匕首 類書纂要ニ云匕首ハ短釵也其作類也故曰匕首

用毒藥塗其刃而以水火之鍊之試刺之血出如一線而人即

死○玉篇云匕必以切匙也矢鏃也

一 馬旋毛吉凶碧雲馬ノ名瑕聞見後錄並曰碧雲瑕既馬也

莊憲太后臨朝以賜荆王王惡其旋毛太后知之曰

旋毛能害人耶吾不信留備上聞為御馬第一獸經曰旋毛在

胸者名  
宜衆

婦人々々志マシムルノ状ヤ丈夫々々彼々志マ

ウシヤ

俗説并所編世六  
井沢長秀説

一 猿ノ厩小置

釋海云晋趙固之馬病郭璞見之

曰使獼猴相馴之病可愈云於是隨璞之言果病愈

矣此説又々々々之志マシムルノ状ヤ忘作マシムルノ

レれ同前

一 大系圖和論語

江源武鑑ハ寛文年中近江の土氏少文

字と知るとありて忘作マシム

但大系圖ハ古々々あり一帝王系圖也  
早分脈諸家系圖と云て見マシムルノ

一 愷樂 軍勝之樂 周禮ノ大司馬王師大獻則令

養愷樂司馬法曰得意則愷樂○周孟子注鬪声

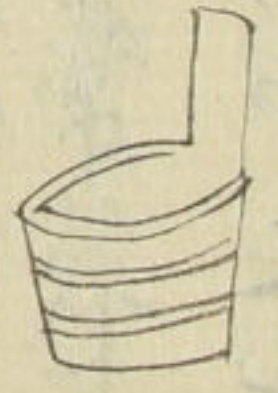
ナドナドナ

一天野樽

河内国天野  
酒名格なり



兵庫樽



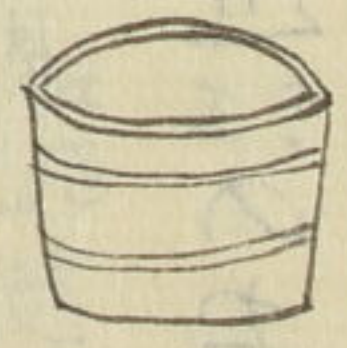
片千

柳樽



如此千ノ  
長ク云

斗樽



右或書見

一 朝夕人

朝夕ニテ云

朝夕二字濁リテ云奉行下役者也

使トドテ勤ル者ナリ

一 雑々拾遺

藤原行定  
作也

云武家故実の事公方源義満の世より將軍

家と公方と稱し万もの礼法と院の所祈は比々いひけり或  
家の故実と云ふんて今川九郎重成板倉重宗兵庫助長春  
伊勢守重忠も満忠も下知して天下の侍と十位に分てり所

謂ゆ一族大名守護印は評定所供氣中次番方圓合  
未男いふに公方の五位ハ院中六位ニ比しハ執符の時  
六位ニ未男ハ五位の心取人といふ如く六位ニ比し  
く印馬の式法と編りし土屋をと解方の事と云ふ

世に三條一統の後をいふ如くは院御あり  
満忠氏板倉作りたるもの以此名の人を重忠と云ふ

一 銭百足 奇支雜流集云唐より牛と一匹といふ日本の酒樽を

湯桶文章ありて牛一索といふと云ふと一疋といふと云ふ

同様の物を正長の間と云ふに字は曰一疋ハ突ハ馬の克索一疋  
のちなりといふと云ふと一疋といふといふ一疋の二と云ふけし支婦  
二人の衣裳も多かり也一疋といふに支婦二人おるもよと一疋  
の支婦といふに福流に匹夫匹婦といふは匹配に物と一對と

奇支雜流集所  
取此江氏信本  
亦長中村を考  
其記

いかにいふに正の字同じ大と正二正といふれは此の遊女の時  
河原者輪の内より大と正を請ふ一矢大と判りし  
二勝三勝といひていふものもあらず其歌に正一正  
か一正ゆゑ大と一正といふものもあらず一正二正といふ  
んといふも世俗のこととていふものもあらず大と正二正と  
いふものもあらず麻兎狸猫鼠小虫に至るまでいふもの  
より科 足と十足廿足といふものもあらず大遊物の時河原者大と  
百足といふものもあらず一正といふものもあらず大一正十  
一正といふものもあらず一正といふものもあらず大遊物  
といふものもあらず

一 婦人春草云々 大法師の形の形よりいふは此の遊物の目録に産衣

いふゆゑにいふものもあらず白紙を紙といふ眉掃をいふものもあらず  
こい奈良の法界寺といふ尼寺より天下へあらず  
一 名の形といふものもあらずいふものもあらずいふものもあらず  
らの形といふものもあらず

一 古年童 四光大師行状翼賛云古年童は彼寺東金  
一 堂七日ノ行ヒノ時手水湯ツワカス者此役者ニナレバ諸ノ公  
事ヲユルサル、故ニ望テ此衆ニ入然則奈良中ニ古年童ト  
云者アルナリ 是興福寺ニ不限諸寺ニ有之古年の代々  
ノ義童ハ下僕シイヘリ此役今興福寺ニ一人有之下行米  
ヲトリニ季ノ神事其外諸事ヲ賜レナガス役ニ大方仕下

相似ク南部傳説

○古武家ノ俗語ニ重代ノ鑑ヲコニ子ニドウト云ハ古年コニ子ニドウト洞也又

重代ノ太カカタナリ。コニ子ニドウト云ハ古年コニ子ニドウトカシコニ子コニ子古年

ニテフルキヲ云也元ハ寺々ノ古年童ヨリ出花詞コニ子ニドウトルベシ

一色紙短尺雑拾遺 難ク拾遺雑拾遺云々色紙短尺ノ市色紙孝謙

短尺ノ市  
抄本ニ云ク一色紙  
の既ニあり短尺  
内裏係式アリ是ハ  
任友ノ尺除目ニ用ニ  
江才ニモアリ

天皇ノ御時々短尺ニヤ短尺ハ公家系我満云不破ノ関を以て

一尺ヨリ短尺ト云ハ或ハ之有以ノ孫ハ世仕助ラレト云ハ此ノ流

大ニ不下短尺ハ毛色紙同ク昔ヨリ之し但其濫觴ノ時代ハ

サメカナラズ云ハ左大臣頼長公ノ日記ニ鳥羽ノ法皇ヨリ宮女ノ

方ハ短尺ヲカキ下サル由記シタヘリ頼長公ハ為世ヨリ百余年以

前ノ人ニ如シハ古来々短尺ハ有シ

一釘貫 塹囊抄云町ノ城戸ヲ釘貫キドト云人ト定セドモ釘

と打込して根と不込又釘貫ト云

一古ハ髪と結いんつけ油いんをいんせいんと云毛とけし

いんせいんといんせいんと云そのまの髪と

削り髪いんと云そのまの髪と云

髪いんと云そのまの髪と云

髪いんと云そのまの髪と云

髪いんと云そのまの髪と云

一禮記曰国君世子生告于君接以大牢音嗣下注食子宰音嗣下注食子掌具音嗣下注食子註接

讀為捷捷勝也謂食其母使神虛強氣也

○三日ト士負之吉者宿奔朝服寢門外

詩負之射人以柔瓠蓬矢六射天地四方註詩之言  
兼也柔瓠蓬矢本大古也天地四方男子所有事也

○射天地食亦及兼字 正義曰柔瓠蓬矢本大吉也昔以柔与蓬皆質素之  
徐音極赦之極大音養 物故知本大古也云天地四方男子所有事者男子  
上事天下事地旁禦四方之難故云所有事然射礼唯四天者謂天地非射事  
所及唯禦四方故止四矢蓬是禦亂之草柔衆之本○礼記古注ナリ

さしあそかく病のりり申と御病のさしあそかく病のりり  
りりともささす御病のりり申と御病のさしあそかく病のりり

貞丈云此説非也大ウテアケノス子アテニ別ニフクハキニアルカ子ノ添タルアリ是ヲ病カ子ナリ

一式之射の奇極也○本帳のりり○二帳のりり○是ハ輕のりり

すしとささすのりり作り土器よむすけささす小器

右紐左紐のりりささす（注）金銀のりりささす（注）右紐左紐のりり

のりり○二帳のりりささすハ輕のみささすと作り同帳と小口切

して三ツとささす一右紐左紐のりりささす味

けハ入るる

一 皷カウ 板イタ 赤板セキイタ 小豆コマメ

一 四十八ヶ所カサ 簞 頼朝ヨリ起ル王番役準シ西国ヨリ京

中ノ过々ニ四十八ヶ所タリ一簞ノ役人数五百人也

山城千人 大和三千五百人 河内千人 和泉八百人 紀伊千人

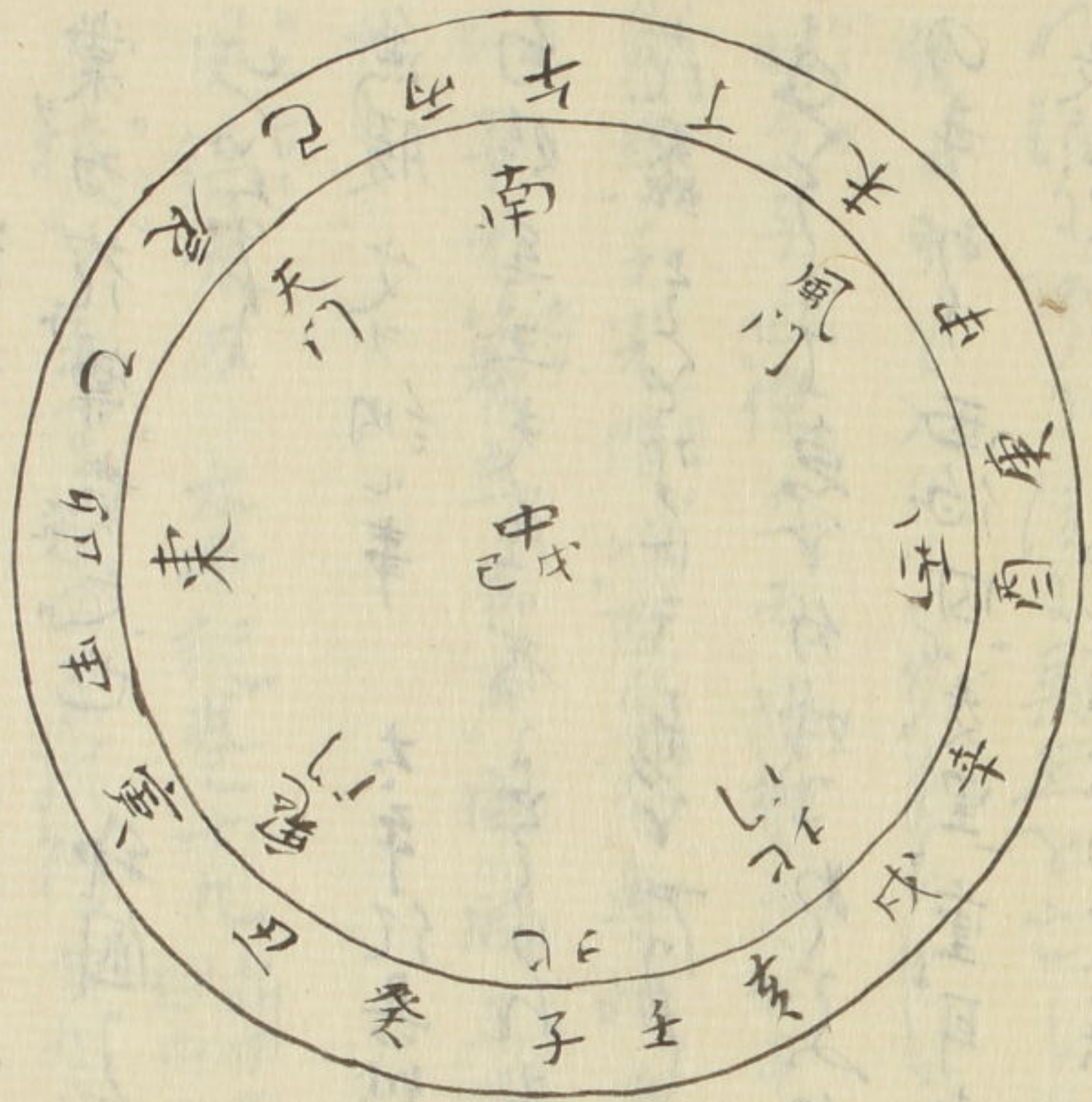
淡路二百人 阿波八百人 讃岐六百 伊豫六百 土佐五百

播磨五百人 備前二百 美作百人 備中二百五十 備後二百

安藝二百五十 周防百五十 長門二百 丹波千人 丹後百人

但馬 <small>二百</small> 人	因幡 <small>二百</small> 人	伯耆 <small>二百</small> 人	出雲 <small>二百</small> 人	隱岐 <small>二百</small> 人
石見 <small>二百</small> 人	豐前 <small>二百</small> 人	筑前 <small>二百</small> 人	肥前 <small>二百</small> 人	豐後 <small>二百</small> 人
筑後 <small>二百</small> 人	肥後 <small>二百</small> 人	日向 <small>二百</small> 人	大隅 <small>二百</small> 人	薩 <small>二百</small> 人
壹岐 <small>二百</small> 人	對馬 <small>二百</small> 人	都合 <small>三百七十七</small> 箇國也		
<sup>其外</sup> 近江 <small>二百</small> 人	伊勢 <small>二百</small> 人	若狹 <small>二百</small> 人	越前 <small>二百</small> 人	

都合人數一萬四千餘人也。〇四十八箇所算ト云華東鑑見



陰陽家天門地門夙門  
鬼門是ヲ四門ト云

貞丈

按鬼門ヲ指ス華地中央ニ  
居テ指ストキハ真ノ鬼門ニ  
中ルベシ東西南北ニカクヨリ  
タル國ニ居テ指スハ真ノ  
鬼門ニ非ス日本ハ東ニカク  
ヨリタル國也鬼門指違フ  
ルニ日本ノ中ニモ南北東西  
ニカクヨリタル所ヨリ指セハ  
猶違アリ此ハ不足ヲ

一書言故事曰穴趾二有鬼門關其南多瘴癘去者罕



得生還諺曰鬼門關十人去九不還注容州北流縣南面石相對號鬼門關

一花。鶴林玉露曰洛陽人謂牡丹為花成都人謂海棠為花尊貴之也 神國うらさくすと仰く花とするといふなり

一魚腹文ヲ納ル事

太平記吾師軍のうを仔細さる事

句賤吳王夫差がわさうりれ土の宰まわりうらふ句賤の臣范蠡をとりけり也とあり 實に魚と入く真魚のまゝうらうて魚と句賤とわさう句賤其魚の腹とこれ一魚のまわり西伯曰姜里重耳走翟皆以為王霸莫死許敵とまゝうらうて吳王が石麻と名の命とわさう

れ御り仰り後吳王とこく由と記さる按范蠡が魚腹と申と入たるうらうらうし陸廣微が吳地記曰吳餘昧之子曰僚立為諸樊之公子光所弒在位十三年僚好炙魚子光憎以百金令專諸進魚置匕首於炙魚中刺僚死子光篡立是為闔閭王たり此うらうて作り名物語たり

一貝鎬太刀 太平記卷十九

新田多良越府城

小足うら

貞丈

志のふい

又校と立す志のふい所かたなり舟と漕ぐらうらう物の如く年々さ肉わりと云く貝の字ハ修字權字サキ下  
一太平記卷十七 若一家の内々世と保川者おまはさくやに出して今の忠義と臥とてて鎧の油と云ふ

金佐のちりと指して海をうごかすべしは中又鑑の  
神カウキリテ 著るる金佐のちり如斯讀べし 鑑の神又金  
作のちりと取らば二品とめらるるは但もさるる金佐のちり  
と云ふこととちりさるるはちりハ中保るるは 按らるる  
著るるは古きよりしとハ善サシくると字く保るるは  
太刀と著ツル共云し

一 照指のちり 太平記卷四十 最勝講之時 及國諱事 南部のちり後ハ  
面ハ小照指のちり夕べ月とのりたるを照指の太  
刀ハ南部のちり通く關海とさるるは兵器と月とこし  
てちりちりちり小太刀と傳名の内ハ隠して保るるは  
りしと照指のちりとさるるは太刀とさるるは

いふは横へんまきして衣の内ハ保るるは  
照指のちりとさるるは照指のちりとさるるは  
す照指のちりとさるるは 今ニワキ 懐中ハ保るるは  
一 照指のちりとさるるは 今世ハ 懐中ハ保るるは

一 茶式の娘ハ徳前園崇福寺の開山南浦紹明正元の出立入  
末ハ徑山寺虚堂ハ嗣法ハ文永四年ハ帰朝すは此巻子  
一 茶式の娘ハ徳前園崇福寺の開山南浦紹明正元の出立入  
の娘ハ徳前園崇福寺の開山南浦紹明正元の出立入  
の娘ハ徳前園崇福寺の開山南浦紹明正元の出立入  
の娘ハ徳前園崇福寺の開山南浦紹明正元の出立入

不慮の殺害ありたり又盗人ありて大小釵と掠取し  
 事有り不慮あり多しなりけりぬも人無加崩やま  
 と小学に是と偏せり近時利休をて至式とせり  
 古書古画とわらうの馴僧と耻てせざる早あふあふ  
 新ひわりしき香吉譜と出たりきくともくさるる  
 ありんばや玩物喪志古聖の深戒也 俗説贅言出  
 一忌日と祭日と用と説 ○世俗先祖の祭忌日と月  
 人あり今枚より二部祭日礼也忌日ハ悲患ノ日凶ニ用  
 へカラズ神武天皇春三月甲午朔甲辰崩日本長曆ヲ  
 以テ考之月之十一日ノ下鴨祭之中酉日也神功皇后  
 四月辛酉朔丁丑崩月之十七日也伏見御香祭を九月

舊事大成経ニハ  
 歴々ノ字者モシテ  
 ラカサレテ 諸書ニ  
 引ニ用ルルアリ  
 常憲子院殿御幼  
 名号徳松君

九日也應神天皇春二月甲午朔戊申崩月之十五日也八  
 幡祭ハ二月初卯也自朔日至十二日之間也又三日中午  
 日又八月十日也上宮太子二月五日薨天王寺祭ハ二月  
 廿二日也舍人親王天平七年十月乙丑薨月之十四日也  
 藤森祭ハ五月五日也菅家延喜三年二月後五日薨  
 寧府祭ハ八月廿二日ヨリ廿四日ニ至ル也北野祭ハ八月四日也  
 近代忌日と用て先祖の祭日とす 誤甚し 詳ニ瓊  
 弟拾遺ニ見元アリ 同前ノ事ニ見ル

舊事大成経と云事ハ 仍書シ天和比上野国黒瀧潮音  
 禪師と云傳系傳引る所の休之承登采女取存て板  
 行ニ出ス右傳中と作ル上日及落頭て采女事ハ遠傳成

潮音毛遠嶋ニ可成也

(常徳院殿御母堂) 元右杖野父、二條園白光平公家日本座即無衛宗判より  
桂昌院様沙歸依の傍り、これ寺(内)に隠居し、

右板行、むせし、つちや、そのや、そのハ、遊夜、成り也

一 彼桑見聞私記、元名、廣元日記と云偽書也大江、廣元

ノ作ニ、アラス、加、愛、仙、彦、ト云者、ノ作也仙庵より元、水野監物

家来ニ、テ、須磨不音ト名、系、ト、後、浪、人、ト、江戸音

山、住宅也、右見聞私記ハ東鑑と似て、書、これ、

文、古、風、ナ、ラ、ズ、時代相違、不、知、合、の、多、共、多、ク、用、之、立

ぶ、り、申、也 片、カ、キ、文、リ、ニ 享保年中、成、道、院、ト、云、奥、坊、主

師、申、物、其、の、学、者、也 始、廣、元、日、記、ト、云、シ、ヲ、松、平、大、後、主、ヨリ

右徳院様石、道院へ、 仰、け、見、聞、私、記、の、真、偽、申、

あ、れ、し、た、花、考、へ、く、偽、書、の、中、に、偽、書、小、室、の、り

右の仙居系図字と好、享保改撰系図と作る、

一 後九郎、其、記、と、右仙居、の、偽、作、と、云

一 前太平記、の、古、書、の、何、れ、作、之、林、家、ノ、門、才、平、山、素、閑、と

云、若、也、京、都、住、之、石、田、軍、記、ヲ、作、リ、板、行、ノ、作、者、沙、歸、也、

より、て、系、終、リ、出、妾、シ、江、戸、へ、来、リ、居、住、ス、正、徳、二、年、卒、去、ス

八、十、二、歳、ナ、リ、前、太、平、記、ノ、一、部、古、書、ヲ、他、の、事、と、云、し、

そ、れ、ノ、自、作、と、多、ク、加、へ、く、申、之、故、以、代、名、の、多、ク、偽、

多、ク、故、實、と、云、さ、る、の、多、ク、何、の、用、ナ、シ、ト、云、さ、る、也、

一 貞夫、云、今、の、具、之、と、在、代、の、鑑、と、草、摺、の、何、れ、等、と、云、り、

今、の、具、之、の、何、れ、之、の、多、ク、也、云、す、と、云、り、と、云、り、也、胸、腹、の

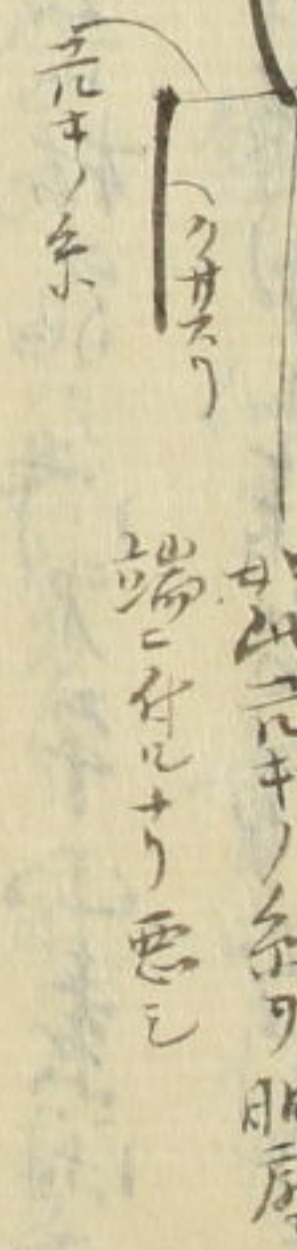
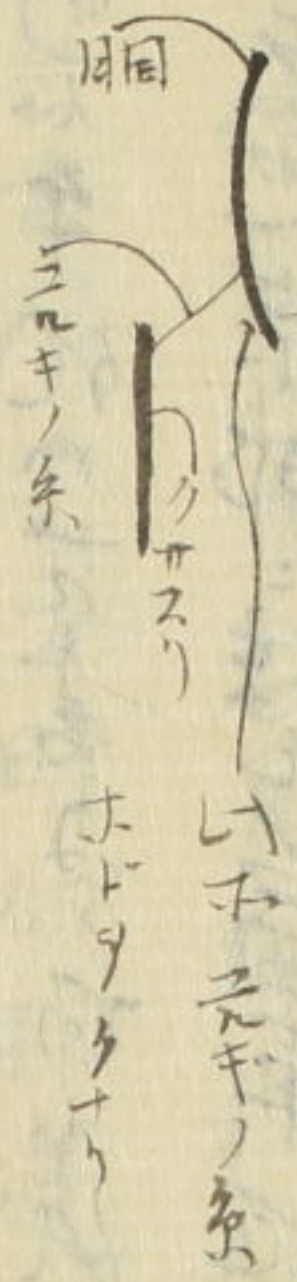
強しゆらこのまゝと竹の葉の如くといはれりとのまじ  
 りたる腰の下に竹やうし右の踵にゆらこのまじと  
 二すぢをさし胸尾の下を二すぢとよゆらこのま  
 とゆらこのまじのまじのまじ胸尾をさしゆらこのま  
 り右の踵のふらふら見ゆらこのまじなり

古製

胸尾

今製

胸尾



一貞丈三鎧の右左七人ぐんの板と膝尾板とをさし  
 右のまじの御くちの七人ぐんの板とゆらこのまじの  
 じちとわけて臂とゆらこのまじとゆらこのまじの板のい

らとゆらこのまじとゆらこのまじとゆらこのまじの  
 板とゆらこのまじとゆらこのまじとゆらこのまじの  
 又た右のまじの御くちの七人ぐんの板とゆらこのまじの  
 ひらめさしゆらこのまじとゆらこのまじとゆらこのまじの  
 一貞丈三古代の鎧は右の強し作らうけず胸尾はゆらこのまじ  
 おさしゆらこのまじにまじの胸尾をさしゆらこのまじとゆらこのまじ  
 も胸尾をさしゆらこのまじとゆらこのまじとゆらこのまじのまじとゆらこのまじ  
 ゆらこのまじ  
 一貞丈三古代の鎧は右の強し作らうけず胸尾はゆらこのまじ  
 痛とあしゆらこのまじとゆらこのまじとゆらこのまじのまじとゆらこのまじ  
 ぬ此ゆらこのまじとゆらこのまじとゆらこのまじとゆらこのまじとゆらこのまじ

一 負夫云出陣凱陣ノ者組ノ事或學者云蛇ヲ伸ト  
 カ4 栗ヲ勝チ昆布ヲヨロテナド、取ナシテ祝トスルノ其  
 名ト其詞ト似タリ附會ナシ是日本ノ風俗ニテ其理ナキ  
 一 負夫云出陣凱陣ノ者組ノ事或學者云蛇ヲ伸ト  
 カ4 栗ヲ勝チ昆布ヲヨロテナド、取ナシテ祝トスルノ其  
 名ト其詞ト似タリ附會ナシ是日本ノ風俗ニテ其理ナキ

一 負夫云出陣凱陣ノ者組ノ事或學者云蛇ヲ伸ト  
 カ4 栗ヲ勝チ昆布ヲヨロテナド、取ナシテ祝トスルノ其  
 名ト其詞ト似タリ附會ナシ是日本ノ風俗ニテ其理ナキ

一 負夫云出陣凱陣ノ者組ノ事或學者云蛇ヲ伸ト  
 カ4 栗ヲ勝チ昆布ヲヨロテナド、取ナシテ祝トスルノ其  
 名ト其詞ト似タリ附會ナシ是日本ノ風俗ニテ其理ナキ

石古良流矢ノ書ヲ見



一 竹津ふた遊めまのあしる

● 繩子のまは 〇まのいたとたてふらしたたのふら (あまふら)  
〇三年いらふと馬の乃と三年 (あまふら) したたの右と射と (あまふら)  
〇月々々のまの向と左 (あまふら) したたの右と射と (あまふら)  
あまふらしたたの右と射と (あまふら) したたの右と射と (あまふら)  
あまふらしたたの右と射と (あまふら) したたの右と射と (あまふら)  
あまふらしたたの右と射と (あまふら) したたの右と射と (あまふら)

● かのまの あまふら 〇まのいらふとまのあまふら (あまふら)  
あまふらしたたの右と射と (あまふら) したたの右と射と (あまふら)  
あまふらしたたの右と射と (あまふら) したたの右と射と (あまふら)  
あまふらしたたの右と射と (あまふら) したたの右と射と (あまふら)  
あまふらしたたの右と射と (あまふら) したたの右と射と (あまふら)

一 吉良流らノ書言ふとまをわてかへまんとまのいたの  
あまふらしたたの右と射と (あまふら) したたの右と射と (あまふら)  
あまふらしたたの右と射と (あまふら) したたの右と射と (あまふら)  
あまふらしたたの右と射と (あまふら) したたの右と射と (あまふら)  
あまふらしたたの右と射と (あまふら) したたの右と射と (あまふら)  
あまふらしたたの右と射と (あまふら) したたの右と射と (あまふら)



盗不<sup>リ</sup>鳥<sup>カ</sup>ラ  
ス杜宇<sup>キス</sup>  
毛楚<sup>語</sup>を  
ロト<sup>ト</sup>  
まふ<sup>の</sup>の<sup>和</sup>  
る<sup>り</sup>の<sup>和</sup>  
論<sup>ナリ</sup>

一 観<sup>カ</sup>の百<sup>百</sup>譚

細詳<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>更<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>能<sup>カ</sup>き  
廣<sup>ハ</sup>江<sup>江</sup>知<sup>知</sup>性<sup>性</sup>云<sup>云</sup>

中国の科斗書と梵語と摩訶末と云

又等轉書と伽那<sup>カナ</sup>跋多書<sup>バツタ</sup>と云和朝<sup>ワ</sup>の梵語<sup>フ</sup>と云る<sup>ル</sup>は

まゝる大竺<sup>テ</sup>を<sup>カ</sup>中国の科斗書<sup>カ</sup>と摩訶<sup>マ</sup>末<sup>マ</sup>と云る例<sup>レ</sup>を<sup>カ</sup>

秘<sup>ヒ</sup>の<sup>カ</sup>中<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>正<sup>カ</sup>書<sup>カ</sup>と云る<sup>ル</sup>は<sup>カ</sup>偽<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>例<sup>レ</sup>を<sup>カ</sup>

か<sup>カ</sup>ん<sup>カ</sup>情<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>ま<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>ゆ<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>し<sup>カ</sup>秘<sup>ヒ</sup>の<sup>カ</sup>書<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>は<sup>カ</sup>れ<sup>カ</sup>ん<sup>カ</sup>梵<sup>フ</sup>

目<sup>メ</sup>の<sup>カ</sup>例<sup>レ</sup>と<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>し<sup>カ</sup>今<sup>イマ</sup>真<sup>マ</sup>名<sup>ナ</sup>假<sup>カ</sup>名<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>和<sup>ワ</sup>假<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>例<sup>レ</sup>と<sup>カ</sup>字<sup>ジ</sup>は<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>

夏<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>例<sup>レ</sup>と<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>し<sup>カ</sup>○<sup>カ</sup>自<sup>ジ</sup>大<sup>ダイ</sup>云<sup>云</sup>按<sup>ア</sup>杖<sup>シ</sup>借<sup>カ</sup>摩<sup>マ</sup>訶<sup>カ</sup>加<sup>カ</sup>於<sup>カ</sup>

跋<sup>バツタ</sup>多<sup>タ</sup>と<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>以<sup>テ</sup>て<sup>カ</sup>秘<sup>ヒ</sup>の<sup>カ</sup>書<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>は<sup>カ</sup>れ<sup>カ</sup>ん<sup>カ</sup>梵<sup>フ</sup>

の<sup>カ</sup>字<sup>ジ</sup>と<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>真<sup>マ</sup>字<sup>ジ</sup>と<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>字<sup>ジ</sup>の<sup>カ</sup>音<sup>オン</sup>訓<sup>クン</sup>と<sup>カ</sup>假<sup>カ</sup>

て<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>假<sup>カ</sup>字<sup>ジ</sup>と<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>即<sup>ソク</sup>一<sup>イツ</sup>カ<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>字<sup>ジ</sup>と<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>我<sup>ガ</sup>

の<sup>カ</sup>字<sup>ジ</sup>と<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>新<sup>シン</sup>字<sup>ジ</sup>と<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>日本<sup>ニッポン</sup>記<sup>キ</sup>と<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>

我國の漢と梵語と同一と云るはたゞくは梵語と云ふす

かゝる國語を多かりぬは梵語と云ふは漢語と云ふの百譚の

説<sup>セ</sup>の<sup>カ</sup>所<sup>カ</sup>會<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>説<sup>セ</sup>も<sup>カ</sup>誤<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>す

一 同書<sup>ドウショ</sup>の<sup>カ</sup>大<sup>ダイ</sup>嘗<sup>ショウ</sup>會<sup>カイ</sup>の<sup>カ</sup>時<sup>トキ</sup>狀<sup>ジョウ</sup>場<sup>バウ</sup>及<sup>キ</sup>の<sup>カ</sup>類<sup>ルイ</sup>也<sup>ヤ</sup>余<sup>ヨ</sup>凡<sup>バン</sup>の<sup>カ</sup>名<sup>ナ</sup>体<sup>テイ</sup>形<sup>ケイ</sup>は<sup>カ</sup>

古<sup>コ</sup>の<sup>カ</sup>子<sup>シ</sup>孫<sup>ソン</sup>也<sup>ヤ</sup>と<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>進<sup>シン</sup>士<sup>シ</sup>と<sup>カ</sup>挑<sup>テウ</sup>華<sup>カ</sup>公<sup>コウ</sup><sup>一條</sup>の<sup>カ</sup>例<sup>レ</sup>と<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>

を<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>世<sup>セ</sup>の<sup>カ</sup>神<sup>シン</sup>位<sup>イ</sup>の<sup>カ</sup>例<sup>レ</sup>と<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>萬<sup>マン</sup>の<sup>カ</sup>例<sup>レ</sup>と<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>萬<sup>マン</sup>の<sup>カ</sup>例<sup>レ</sup>と<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>

半<sup>ハン</sup>と<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>子<sup>シ</sup>孫<sup>ソン</sup>也<sup>ヤ</sup>と<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>進<sup>シン</sup>士<sup>シ</sup>と<sup>カ</sup>挑<sup>テウ</sup>華<sup>カ</sup>公<sup>コウ</sup>

一 千載集<sup>センサイシュ</sup>卷<sup>クワン</sup>二<sup>ニ</sup>春<sup>シュン</sup>哥<sup>カ</sup>二<sup>ニ</sup>み<sup>ミ</sup>ら<sup>ラ</sup>の<sup>カ</sup>例<sup>レ</sup>と<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>時<sup>トキ</sup>を<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>國<sup>クニ</sup>と<sup>カ</sup>

花<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>例<sup>レ</sup>と<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>源<sup>ゲン</sup>義<sup>イ</sup>家<sup>カ</sup>朝<sup>テウ</sup>臣<sup>シン</sup>

吹<sup>フイ</sup>凡<sup>バン</sup>と<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>國<sup>クニ</sup>と<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>世<sup>セ</sup>の<sup>カ</sup>例<sup>レ</sup>と<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>國<sup>クニ</sup>と<sup>カ</sup>

右<sup>ミドリ</sup>の子<sup>シ</sup>孫<sup>ソン</sup>也<sup>ヤ</sup>と<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>國<sup>クニ</sup>と<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>國<sup>クニ</sup>と<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>





まのの字と云けぬる事書家の故実なり

一 觀鸞百鍊千字文律呂調陽律呂調陽ノ異なり  
本律呂調陽調陽調陽ノ對語也智永百字律呂  
ト書智永八百本トテ千字文字ヲ書タルガ後ニ律呂ノ熟語  
ニヒカシ字ノ近ク似タルニ或テ律呂ト書數百本散シテ故  
後世是ヲ正本トシテ召ノ正シキヲ察セズ唐宋元明善書  
モ皆律呂ト書シ也戲鴻堂帖ニ載ルニ帖ノ内一帖ハ律呂ト  
書名有東都御府ノ御本ニ律呂ト書タル智永一本有之  
○又鳴鳳在竹ト在樹ト二本有り是ハ君父ノ諱ヲ避タル  
者歟○又缺扇團潔ト女慕貞潔ノ字ニツアリ千字  
文ハ梁武帝自千ニカセテ書テ殷鏡石ニ命シテ周貞嗣

ヲシテ韻語ニ作ラシムトモ云又王右軍ノ字ヲ千拾ヒテ韻  
セシムトイハ潔ノ字ニツアリタル事モアルベキ者也右廣漢和慎説

一 古花降銀ト云わめり圓ハ俗説贅字ニ見タリ方二寸斗

俗説贅字ニ  
銀ノ圓アリ

ニテ端ニ星形連リ面ニ花降ノ二字アリ是通用ス銀ニアラ  
ズ古代ハ錢斗通用シテ金銀ハ只器物ナドノ飾ニ用ル斗進  
物ナドニハスル近年或人出羽ノ國ノ金山見物ニ行ル時銀ヲ鑄ル  
見シニ銀鑄ル者此銀ヲ花降ニシテ御目ニ掛ベシトテキニ水ヲ付テ  
盪タル銀ノ面ニ水ノ滴ヲ振レハ其滴ノ痕付テ落花ノ散カハリタ  
ガ如シト語りシ其語りシ人兼テ花降ト云フヲハ知ラヌ人ナリシ  
其語ニテ花降ト云名ヲ安得タリト土著ノ儒官谷氏ノ説

一 後代ノ風俗ニ貴人前ニ扇ヲ持テリ是古キ事也上  
古ヨリノ法ニ續ク日本紀卷廿四曰廢帝天平宝字六年八月丙  
寅御史大夫文室真人淨三以<sup>シテ</sup>年老力衰優詔特<sup>ニ</sup>聽官中  
持扇策杖トアリ扇持事禁制ナレ故云サレシ

一 堀河院次郎百首泉節題兼昌めれ名今もそ  
ゆゑにけりてゆゑにけりてゆゑにけりてゆゑにけりてゆゑにけり

一 同書云妓女題 おとらよとこのよめとこれ  
ありてありてありてありてありてありてありてありてありてあり

一 脂燭 同書元服題兼昌らそららのふいのれり  
脂燭ハ松明ト云松ノヒキヲぬり  
削リ燃ス也本ハ紙ヲ細ク裁テ巻セ  
紙ニテ油ヲ  
ケルヲニミアラス

一 憎忌五月 同書経日意題忠房めれその後と日と  
いふそやみそらふもませららん

一 同書ふのり 同書雪の題忠房 同書雪の題忠房  
めれそららのふいのれり

一 同書ふのり 同書雪の題忠房 同書雪の題忠房  
めれそららのふいのれり

一 同書ふのり 同書雪の題忠房 同書雪の題忠房  
めれそららのふいのれり

一 同書ふのり 同書雪の題忠房 同書雪の題忠房  
めれそららのふいのれり

一 的之祿 續日本紀卷三文武天皇大宝三年春正

月丙子朔<sup>略中</sup>壬辰定大射祿法親王二品諸王品二位一箭中外院布二十端中院二十五端內院三十端三品四品三位一箭中外院布十五端中院二十端內院二十五端四位一箭中外院十端中院十五端內院二十五端五位一箭中外院布六端中院十端內院十六端其出皮者一箭同布一端若外中內院及重中者倍之六位七位一箭中外院布四端中院六端內院八端八位初位一箭中外院布三端中院四端內院五端中皮者一箭布半端若外中內及皮重中者<sup>檢合</sup>上但勲位者不著朝服<sup>其</sup>其當位次

一七者四十九日法事○續日本紀卷三文武天皇紀曰大寶三年二月癸卯是日當太上天皇七七遣使<sup>使</sup>回大寺及四天皇山田等三十三寺設齋焉

一軍團○續日本紀文武天皇紀日慶雲元年六月丁巳勅諸國兵士團別分爲十番每番十日教習武藝必使<sup>使</sup>奔整令條以外不得<sup>不</sup>難使其有<sup>有</sup>關須守者<sup>者</sup>隨使<sup>使</sup>斟酌令足守備○已未令諸國勲七等以下身官位者<sup>者</sup>聽<sup>聽</sup>直軍團續芳上經三年折當兩考滿之年送式部選同散位之例其身材強幹須堪時務者<sup>者</sup>因司尚量亮使之<sup>之</sup>年考第一准所任之例

一禮 同書慶雲元年正月辛亥始停百官跪伏之禮



よ建長四年乙未の冬神皇正統記の年以よめりて暇のあ  
ら心閑らるる時節はわづらふるものなると東山の藤子  
あつて蓮の臺とて西の西とていふ翁念仏のいふよも  
とまきつて終ることなうとてなすいりて菅原為長系図  
よの寛元四年三月卒ストアリ右ノ序ニ建長四年ニ記  
ストアリ建長ハ寛元ヨリハ後ニ系圖ニ寛元トアルハ誤  
ナルベシ若康元ノ誤歟康元ハ唯一年也不審

一大小ノ刀ヲ帶シタル始時代ノ事信長秀吉ノ比ヨリ始リシナ  
室町殿ノ比ニテハ武士皆腰刀ハカリ帶シテ大刀ヲカラハ供ノ  
者ニ持セシナリ腰刀トハナシ目貫ニ而鑿モナキ短キ刀ノ事ナリ 眼差ニ  
鑿ヲ入レホカヲ添ヘ帶シテ大小ト喚ビ習ハセリアル書此書題  
号十三秀  
時ノ記ニ云リ肥前国至龍造寺大岡ニ降参シ御目ニ参リ秀

吉へ伺公イタシタリシ時秀吉龍造寺ニ被仰ハ久々ニテ對  
面シ我等ガ種々諸道具見セ可申也トテ則龍造寺ヲ  
被連矢藏ニ上リ給ヒシニ少モ龍造寺ニ氣遣ナリ刀眼  
差ヲスギ龍造寺ニ可持由被仰先へ上リ給ヒシニ竜造寺跡  
ヨリ大小ヲ持チ上リ給フト云云

一源平盛衰記卷二十四坂東落書ノ余ニ八幡殿ノ  
家捧白色白則金性也刑部殿之家捧黑色黒則水  
性也水与金和合持長生之相也云云此刑部殿ト  
云フヲ刑部丞兼光也ト云説アリ誤也平家物  
語長門卷七源三位入道参高倉宮余ニ爰尋其先  
跡者八幡太郎兼家捧白色白色則金性也刑部卿



香ツカガヒ云  
赤字ニ託ス

イフ所ノ類  
レ吾國ノ比  
二吾國ノ比  
字ヲ借ル  
氏記ニ借ル  
十カヲヤル  
一香ヲ焚ク  
玉偏ノ環ノ字也  
景ニ魚巾切音銀  
聲玉有起跡曰環  
一香ヲ聞クト云事  
久而不聞其香即與之化矣  
之肆久而不聞其臭亦與之化矣

香シキ也雲母  
フヘキテ用ル也  
金偏ノ銀ニハ非ス  
環ノ字ハ字  
環葉ト云  
又昔恨切懇去  
又昔恨切懇去

家語曰與善人居如入芝蘭室  
久而不聞其香即與之化矣  
與不善人居如入鮑魚  
之肆久而不聞其臭亦與之化矣

一香ノ串ヲノミテ云事

此香ニ  
長平ノ方  
十粒香トナシキ香ヲ姓キテ後ニ其色

續後拾遺卷上  
順徳院所製  
略して云  
字  
と云流も有り

一公家品ノ事状ハ判ノ事ト云事  
判ノ事ト云事ハ判ノ事ト云事

又右位書ヲ於テ是者ノ事状ノ事ト云事  
判ノ事ト云事ハ判ノ事ト云事

一地下ノく規式ノ條ニ於テ云事  
さい教ニ云事ハ判ノ事ト云事



ふみまをふしなす準くあべーあを又同く準く知  
べく左いとの流まののりこの流七の流ともむを何れ  
せあこといさうくさうね多くあるしゆまに今せさうね  
のゆとせあをあをくさうあやましくせあこの流はと  
といあのをゆし 大平流七あこの流の記

一添水 ツツ 枋海一得 鈴木嘉善 煥卿著 云山里ニ引板ヲ用テ山獸ヲ防

ク鳴子ニテハ鳥ハ驚ケケ野猪ナドハ怖ヌエハ是ヲ添水氏

云僧都玄廣ノ山田ヨリモふ川の身をもとゆしとせし

流し流る水只板とほく （假名カヒコトホニ出） 動テ鳴ルト見

響 ヒキカク 亮 タカク ノ強 ヒキカク し ヒキカク と ヒキカク 中略 ヒキカク シテ ヒキカク 水牌 ヒキカク 上

宛番餘篇云以板激水以鼓之田圃防禽獸之害也

夏大母は流非に流水のカタラをふしと申は遠く古事にはをいふとありはる子  
ヲ用板を正鑑要略に具記ありをいふとけり激水トアれヨリテ流水ト改めし

一虎子 漢ヲ入ルツカフ又 同書云通鑑後周記曰掃廁行乞之人

取 取 人家 取 虎子 取 寫 取 去 取 穢 取 惡 取 洗 取 之 取 音也 取 是 取 掃 取 廁 取 八 取 六 取 一 取 麩

掃ハ説文ニ絶也水ニテユリル也五雜俎北人不設厠風俗有ト

云西京雜記以玉為虎子為便器此ヨリ虎子ヲ便器ト名トス

北地ハ水田ニテ三厠ナレニ虎子ニテ取リテ此ニ畜積テ乾シ用ト

云行乞人トハ花子ノ類也

一牛撲印指ヲ印スルシ今ハ判人如シ牛判也 判判ノ事

一田地幾川ト云事 右田書ニ 三越奥羽北ノ田大同ニテ田産ヲ數

フルニ何カリト云富民ノ産ヲ云幾千川何万カリト稱ス其高

字彙ニ云東  
雜記ヲ引テ  
銅ヲ鑄テ  
作ルトアリ  
以テトス

ハ定ニ知タル者ナシ先年越後北鄙ノ老農ノ一奴ニ問フニ曰  
田四百坪ヲ一反ト云是ヲ百カリトメ男一人ニテ五百カリアテ  
ニ作ラシム田五反百カリヨリ穀二三石ヲ得上中下田ト是ニテ幾  
カリト云リシレタリ

一 詞 同キニ云 梵語ノ和語ニナリタル多ク翻  
譯名義集ニ摩尼フツハニ謂此如意フツハニ天台曰摩尼者如意也宝  
珠也ト摩尼宝珠ト云如意宝珠ト云テ此珠ヲ得ハ物  
事思フテニトカヤ古歌ニ祢のまふくまのまふくくナド  
随意如意ノ義ナリ是日本紀ニ如意ヲニニクト訓セシ  
コレノ貞丈母日本紀ニ如意ヲニニクト訓セシハ梵語ニヨ  
ルニハアラジ唯テニト云 詞ナリ任ノ字也テニト云 詞ヲ伸ハル也

一 祝髮 同書ニ云今致仕シタル人鬘髮スルヲ祝髮ト云テ賀

ス祝ハハヒト訓ニハ賀スルナルベシ列子湯問篇曰南國之人  
祝髮而裸張湛注曰孔安國注尚書云祝者斷截其髮也ト  
シカラハ髮ヲ截ルコトニテ髮ヲ鬘コトニハ非ズ吳越ノ風俗ニテ裸  
テクラスコトナレバ祝ハヘキコトニモアラズ

一 藏鉤 同書ニ又藏疆トモ云唐ニテ酒飲賭ニスル戲ナリ

一 適莫ノ字 同書云紫芝園ノ論語古訓曰秋先生論語

適莫ノ解ニ引レタル寫志諸葛亮ノ語今ノ三国志ニ不見  
ト南鄭ノ云レシコレニ煥卿按 魏志李豐傳ニ曹爽專  
政李豐依違ニ公之間各有適莫ト是ニテ適莫ノ義明ナリ  
一 楚割 和字正濫要畧難波子傳抄云和名抄云貞條遊仙





一ツコトヨシ又ハ胸ノ通りニ結付ベシ馬ハ鞍ノ四所ノレホダニ結  
付ベシ緒ノトケナル様ニ結ベシ  
一軍用ノ長持ハ底ノ廻リ其外合セメニコクソウルシヲ付テ水ノ  
入ナル様ニシテ置テ川ヤドニテ舟ニ用ルヲアルベシ中ノ道具  
ヲ出シカラ長持ニシテ水ニ入ルニ二人斗ハ乗ルベシ竹ニテ子ク  
ニ深クカケゴラシテ置ケハ板子ニナリテ猶ヨシ或書ニ見

一 衆兵ノ如ク置テ置ケハ板子ニナリテ猶ヨシ  
一 衆兵ノ如ク置テ置ケハ板子ニナリテ猶ヨシ  
一 衆兵ノ如ク置テ置ケハ板子ニナリテ猶ヨシ



